

★南アの「土地収用」問題の真相＝トゥラニ・ロモ駐日南ア大使

南アフリカ共和国のトゥラニ・ロモ駐日大使は昨年12月5日、日本AALLA主催の「マンデラ生誕百周年」記念集会で講演し、マンデラ大統領の業績とともに日本での反アパルトヘイトの運動やアフリカ民族会議（ANC）との連帯の歴史について詳しく語った。以下に紹介するのは、その後、会場からの質問に答えた部分で、南アが現在取り組んでいる開発計画などを説明した。

質問1（大村） 南アで政治的な平等は実現したが、その後経済的な対等と平等の問題をどうするかということが、問題になって、トランプ米大統領などが横やりを入れたりしているわけですが、この経済的平等の課題をどう実現していこうとしているか、教えていただきたい。

質問2（新藤） 興味深い話を感動をもってききました。長い間の植民地支配のなかでゆがめられた社会で問題解決するのは大変なことだと思います。経済格差が非常に大きいわけで、ジニ係数が0・6というような格差です。それに人種的な要素が重なっているというのが難しい問題だと思います。それをどのように経済政策で、あるいは社会福祉政策で克服しようとしているのかというのが一つの質問です。もう一つは土地所有の格差が大変大きなものがある。これもジニ係数で0・8ぐらいある。これも植民地社会のなかで形成されたものですが、それを土地改革というような形で出していけるのでしょうか。これをお聞きしたいと思います。

質問3（河内） ANCのマティール代表にも何度かあったこともあり、1990年代のアマンドラの埼玉講演を成功させたいい思い出があります。マンデラ氏について、マハトマガンディーの思想アヒンサーを米国のキング牧師とともに発展させた人物として尊敬しています。しかし一部の報道では、南アにおいても汚職の問題であるとか、白人からの土地の取り上げであるとかのニュースが聞かえてきますが、そういうマイナス面があるとしたらANCや南ア政府はこれからどのような対応をとっていこうとしているのでしょうか。これをお聞きしたいと思います。

ロモ大使 質問に答える前にもう一度、南ア政府と大使館を代表して私たちの感謝をお伝えすることをお許しいただきたいと思います。最大の抑圧的な人種差別政権にたして戦っていた時にアフリカ民族会議（ANC）に与えられましたみなさんご支援にたいして心からの感謝をしています。この時期に日本AALL

AがANCにおこなった貢献を隠すことはできません。同時に、ジャーアリストの野間寛二郎氏の仕事を認めることも大事ではないかと思います。彼は日本AALA活動家の一員として1963年にタンガニーカ（のモシ）で開かれた第2回AA人民連帯会議に参加し、初めてANCの代表と会いました。私が彼を認めることが大事だと思うのはまさに彼がとった立場と態度のためです。彼は批判をされた時に、積極的にかつ建設的に耳を傾けました。人権を無視した過酷な政策をとって少数の白人の利益を追求している政府を支持している日本政府の行動に関して。彼はほかならぬ日本AALAのメンバーにたいして建設的な批判をおこなって、日本で反アパルトヘイト運動を起こす必要があるということを訴えました。

他のもいろいろなグループがあった事実を認めることも大事だと思います。たとえば1977年にアフリカ研究会を立ち上げた静岡AAのグループです。彼らもANCにたいする支援の運動とたたかいを強化しました。さらにアフリカ行動委員会の活動がありました。この組織も日本AALAと連携してアパルトヘイトについて人々の認識を、研究発表や出版活動を通じて広めました。他のいろいろな反アパルトヘイト運動と連携して抗議活動を広げました。ですから日本AALAの役割は大変大きく偉大で、評価しすぎることはないけれども、他にもいろいろな団体の活動があって、日本AALAの主催する日本反アパルトヘイト委員会につながった、そういう団体の存在をも思い起こし、役割を認めて感謝をしたい。質問への答えに先立ってこのことを強調したいと思います。

さてインバランス（調和）についての大村さんの質問ですが、不平等の問題に南ア政府が十分にとりくんでいないのではないかとのご懸念があるように思います。端的にお答えすれば、民主主義は目的地ではないということです。独立も目的地ではありません。これは継続するプロセスであり、たたかいは続いています。日本AALAも1950年代に設立され、今も活動しています。まさに同じ理由で、段階を踏んで一步一步、団結した国として成果を上げるよう努力しています。我が国は不平等や貧困、失業に直面しているのが現実です。その現実があるからこそ政府は不平等と貧困、失業に立ち向かう計画に取り組んでいます。国内発展計画という政策で、まさに大村さんが言及された問題です。これは国づくりのプロジェクトです。現実には不正義があり、植民地主義のアパルトヘイト政府が残した影響は巨大です。350年間の植民地化、搾取と抑圧があり、多数派がシステムによって周辺化されました。したがってわれわれは民主主義のプロセスにあって、政府が人民によりよい生活を保障できるようにしようと努力しているので、段階をふんで、民主的で人種差別や性差別のない国づくりにとりくんでいます。

す。その目的地は「1930 国家開発計画」のビジョンに要約されており、政府はあなたが提起された問題に取り組み、国民が望んでいる良質な生活を保障するために努力しています。政府が国民生活をどれだけ改善したか一つ一つ数字をあげませんが、数百万人が住居を確保し、電気を使い、上下水の基本的なサービスをうけるようになりました。1994 年前にはなかったものです。その時代はすべてが少数派の白人のためにだけおこなわれていたのです。したがって時間はかかりますが、私たちは決意をし、不正義に取り組む政策に自信をもって楽観しています。同時にこれは日本 A A L A のみなさんが A N A C や南ア共産党の人々と交流し論議し、よりよい次世代をつくりだすための思想を共有することも責任だと考えます。ですからたたかいは続くのです。

新藤さんの質問です。植民地主義の歴史がつくりだした重要な問題を提起されました。国内のいろいろな文化やグループが問題の原因となって発展を阻害しているという問題です。どう解決するか、とくにあなたは土地問題を提起されました。新しい統治が始まって 24 年がたちますが、私たちはいまだに貧困と不平等失業の問題とたたかっています。その際に、前述しましたようにこの問題の取り組むにあたって、野心的な運動で経済を成長させようとしています。これを支えるのは「2030 国家開発計画」のビジョンです。これは市民のすべてのエネルギーを経済成長に集中して、経済の恩恵がすべてに行き渡るようにし、人民にサービスを提供する政府の能力を高めるロードマップです。また南アは民主的な立憲国家として政府は人民に導かれています。人民による人民の政府であり、最高法規である憲法に従っています。そして国民の声が反映されるのが議会です。その議会で、「補償なしの土地の創造」が必要だというよびかけがおこなわれたのです。そこで議会はそのよびかけに基づいて委員会にたいして、全国を回って民間セクターや市民社会、さまざまな宗教組織の声をきき、国民のコンセンサスを得るよう裁可したのです。この運動の目的は民主主義を確保することであり、我々の土地を取り返すために政府と議会がとった態度なのです。これらの土地は、我々の祖先の意に反して 1910 年と 1920 年に強制的に取り上げられたものなのです。ですから補償なしの土地の接収は 1920 年の不正義に対処することをめざすものなのです。わずかな生産手段しかもたなければ、いかなる政府も国民に良い生活とサービスを提供することはできません。とくに食料安保を確保する土地がグローバルな特権階級に独占されているのですから。このように憲法にのっとったアプローチを通じて政府は、投資家たちが恐怖を感じることがないような立場をとり、土地を人民に再分配することで不平等の問題に取り組んでいるのです。また重要なことは、大統領が主導する野心的な運動は投資を呼び込み、民間資本の投資を促進して良質な生活を人民に提供するためのものです。

これがわれわれのアプローチであり、政府が民間の市民社会と協力して経済を成長させ、国内にビジネスの機会を作りだそうというものです。また労働問題にもとりくんでいます。また「2030 国家開発計画」を追求するにあたって、南アの希望をアフリカ連合（AU）の 2063 年計画と一致させています。2063 年計画は統合され繁栄した平和なアフリカをめざすものです。国際社会のなかでダイナミックな力となる市民の力によってです。したがって我々の取り組みは決して狭い視野からではなく AU2063 年計画のなかに位置つけて国内の不平等の問題にとりくんでいるのです。

河内さんがマティラ（ANC 初代東京事務所長）とお会いになりアマンドラの公演に尽力いただいたことに感謝します。日本 AALA だけでなく名前を挙げなかった多くの人々のおかげで今一度、あなたの貢献に感謝したいと思います。南アの土地問題などに関連して日本や世界で広まっているネガティブな報道の問題に触れられました。田中代表と野本さんにもお話ししたのですが、1844 年から 45 年にかけてのベルリン会議ではアフリカ分割と植民地化が決定されました。分割してすべての資源を奪取するという決定です。しかし文化的な遺産と信仰をもった勇敢なアフリカ人民を支配しようとするれば、大事なものは情報です。その情報が欧州列強によって支配されたのです。情報をコントロールするものが富の支配者になります。17 世紀の中頃にまでさかのぼってメディアは南アだけでなくアフリカ大陸全体に敵対的になり、西欧優位のイメージが作られました。欧州人は優越した民族であり、富を支配するのは彼らでなければならないというイメージです。当時、英仏独、ベルギー、ポルトガルがアフリカを植民地にしました。1960 年代に多くのアフリカ諸国は独立を勝ち取りました。しかし西欧による分割と長い間の植民主化の兆候や後遺が残されました。そしてあなたの質問に関していえば、いまでもアフリカについて積極的な報道を見つけるのは不可能と断言しているほどです。在京の大使たちがアフリカは世界でもっとも豊かな地域だと訴える機会をさがさなければならないと断言しているのもこのためです。しかしメディアは敵対的でアフリカはとても不安定で、病気が蔓延し、投資にふさわしくないという報道を流しています。ですから日本国民と世界に正しい姿を伝えることは私たちの責任であり、日本 AALA や ANC の責任でもあります。メディアにある西側優越のメンタリティを変えることは、継続するたたかいであり挑戦です。日本はアジアで最初に近代化と工業化を成し遂げた国です。しかし長年にわたって日本も西側諸国から積極的にあつかわれませんでした。いつも彼らの利益が第一だったのです。だから私たちは TIKAD に感謝しています。それはアフリカの発展についての東京の国際会議で AU とともに手を携えて協力する機会だからです。このような多国間の枠組みを強化したときに

のみ、正しく眞實で、助言となる報道をうける立場にたつことができるのです。しかしこれは集団的な責任です。南アやアフリカだけの責任ではありません。帝国主義を理解し、留意してください。日本の国民も 1945 年以後の押し付けの時代を経験しています。それは米欧諸国が優位に立って日本の行末を指示していた時代でした。誰も聞きたくはないですが、それは我々の出自についての現実でした。私がいいたいことは、アフリカの小国についての西側の報道についてメディアによる否定的報道を、われわれが協力して変えることが大事だということです。彼らは文明を発展させたのは西欧だけだというウソの話をつくりだしているからです。最後に私たちは南アで直面する課題への取り組みをすすめていますが、同時にグローバルな経済や世界政治の転換など直面する課題に手をこまねているわけにはいかないということも強調したいと思います。

一つ付け加えたいことですが、2010 年に南アは南の諸国で初めて FIFA ワールドカップを主催した国となりました。この大会の前には世界中のマスコミから、あんな危険なところで大会なんかできるわけがないとさんざん叩かれました。ところが大会が行われ、そして終わった後に当時の FIFA の会長がマスコミに語ったなかで、今回の大会は今までの歴史で一番安全なワールドカップだったと語りました。このことで当時のメディアの人たちにも実際現場にいて、たしかにそうだったと実感してもらい、またそれが世界中に発信されたわけです。ただ現在は、土地問題だとか白人の土地所有者にたいするニュースが出回っているわけですが、2010 年にダーバンに来て日本の代表チームが試合をしたときに、日本のサポーターにもあって、ブルゼラなどいろんなことに興味を示してくれた人たちに会いました。ただ世界の人々はマスコミの影響を強くうけるもので、CNN の報道が 24 時間流れている報道をみて、それが現在のアフリカ全体の姿だと思い、ワシントン DC のツイッターから発信される内容を読んで、すべてそれが本当のことだと信じてします、こういう影響を大変受けやすいように思います。ご臨席の皆様方のなかにも南アに行かれたことがあるかと思います。ですから実際に皆さまの目で見たものが眞実だと思いますので、どうかアフリカに来ていただきたいと思っていますが、現在、南ア国内だけで日本の企業 145 社が活動しています。こういうことから南アにたいする日本の信頼度というのは着実に伸びていくのではないかと思います。

質問 森といいます。先ほど反アパルトヘイトに関してマンデラ氏が、宗教が積極的な役割を果たしたと言及されていましたが、クリスチャンと思うが白人にも黒人にもある宗教心が役割をはたしたのか、それとも宗教団体や組織が役割果たしたのか。現在、日本にも宗教団体があるが、いまの南アの宗教組織はいま

の政府の政策を後押しする方向なのか、それともデリケートだから複雑な問題なのか。

ロモ大使 世界の偉大な人について信仰について話をするのは難しいのですが、特にマンデラ氏の個人的な信仰心について私から申し上げるのはむづかしいと思います。信仰というものは声にして表立ってでてくるものではないと思います。ただマンデラ氏についていえば彼の信仰心はいろいろな形で表れていると感じることはあったと思います。またマンデラ氏が生まれ育った時代は、政府がアフリカ人のために作った学校はなく、欧州からきた宣教師たちが地元の住民にたいして子供の教育をほどこす、日曜学校などで宗教を布教しながら幼児教育もするという役目を果たしていました。そういう施設にマンデラも通うことになり宗教にふれていったわけです。それが彼の人格形成に影響することがあったと思います。それ故にクリスチャンになったということもあるかと思います。また現在の南アでは統計上は 80%がクリスチャンになっていますが、そのほかにもイスラム教やさまざまな宗教の人たちがいます。憲法ではすべての人が自由にどんな宗教でも信仰できることを認めています。信仰の自由ですね。したがって国の政策にたいして特定の宗教が大きく影響するということはありません。マンデラ氏については、正直で謙虚で愛にあふれた人だと思っています。先日も田中さんや野本さんに話しましたが、マンデラ氏は形としてそこに存在していなくても、気持ちが常に近くにいるような、皆様の隣にいるような感じを持たれる人ではないかと思います。これも一重に彼の人柄、人格ゆえのことかと思います。27 年間も投獄されながらその後社会で活躍できたのも、このような信仰心があればこそだと思います。そして現在お集まりのみなさんや日本政府の方々が、このようにしてマンデラ生誕百周年を祝い、こういう会を開いて話を聞いてくれる機会を作ってくださいすることに私は感謝を申し上げたいと思います。南アの人々にたいする皆様の愛と情熱が私たちを支えてくださっていますし、こころより改めて感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(以上)